

## 広島県三原市大和町のハトムギ栽培

JA ひろしま中央 大和グリーンセンター 貞宗 幸生

広島県三原市大和町の、ハトムギ栽培との出会いは昭和50年代にさかのぼる。県内有数の稲作地帯であった当地域は、当時全国規模で取組む事となった生産調整対策（水田利用再編対策）の対応に揺れていた。米に代わる作物での転作が推奨され、当然のことように、麦・大豆と土地利用型作物が導入されたものの、その結果たるや散々なものであった。乾田化の難しい当地域の水田にとって、これら畑作物の栽培は容易ではなかった。特に圃場整備直後の転作圃場は、排水不良による発芽障害や枯死等の湿害が相次いだ。『湿田にも、対応出来る転作作物が欲しい。』と、模索する日々が続くなか導入されたのがハトムギであった。農協と町役場とでハトムギプロジェクト班が結成された。また、ハトムギ専任の担当者も誕生し、生産調整の対策とあわせ新たな町の特産振興を担うこととなった。「古くて新しい作物。」当時ハトムギはこう呼ばれた。マイナー作物が故に栽培に関するマニュアルも乏しく、頼る指導機関もない状況に生産現場の苦労は想像以上のものであった。

町内全農家に200gのハトムギの種子を配布。集落単位に設置した展示圃場での講習会。先進地岡山県への研修視察。試行錯誤のくり返しの日々であったが、「地域の新しい顔（作物）」として少しずつ町内の現場圃場にと浸透を始めた。営農組合組織による集団栽培も開始され、面積、生産量ともに拡大。農協への集荷量も年々増加するなかで、『生産物に付加価値を』の声から開始されたのが、地場産原料を100%使用した地場加工であった。加工品の直売所を併設した農協のハトムギ加工場が整備され、「焙煎はとむぎ茶」を主体に加工事業がスタートした。その後、委託加工による、麺類、菓子類等も加わり、加工製品の種類も20種を超えた。また、平成10年から「はとむぎ飲料」を発売し現在280mlと500mlのペットボトルを中

心に着実な伸びが見られる。

これまでの経過を振り返り、当地での課題と問題点。また、新品種へ期待と要望をあげてみた。

### 1. 新品種への要望＝収量性

国内産ハトムギの評価また要望は高いが、需要に応えられない状況にある。この30年間平均反収の飛躍的な向上は見られず、反収の引き上げは相変わらず永遠のテーマとなっている。また、反収、収穫量に年次差が激しい。ハトムギ栽培がまだまだ経営的に不安定といわれる所以であり、伸び悩みの大きな要因ともなっている。超多収とはいかないまでも、収量性の高い新品種の育成と安定収量の確保によりハトムギ栽培本体の安定化を図ることが、今後のハトムギ栽培にとって必要である。

### 2. 新品種への要望＝病害虫対策

- (1) 「葉枯れ病」は、ハトムギにとって唯一、また最大の病害となる。新しい品種の導入後の数年間は密度が低く、その後増加する傾向が見られる。防除のための登録農薬が少ないことや防除作業も他作物に比べ難しい現状から、「葉枯れ病」に強い品種の育成が望まれる。
- (2) 長年の栽培により、メイチュウ類やヨトウ類等の害虫は増加する傾向にある。今後、温暖化によりこの傾向は高まることが予想される。また、年により発生量に差が見られる。発生の時期も異なることから防除時期の判断が難しく防除効果も充分上がらないのが現状である。葉枯れ病防除と同様に防除作業が困難な現状にあり、これら虫害に強い新品種の育成が期待される。

### 3. 新品種への要望＝作業性

#### (1) 草丈

ハトムギの草丈の長短は、管理作業の上で重要な要素である。特にコンバイン収穫等の機械作業でその比重が高い。このことから、生産現場の短稈化への要望は常に高いものがある。収量性を備えた短稈品種が理想とされる。もっとも、草丈は、その年の気象や土壌、施肥など栽培環境や条件による影響が大きい。また、施肥時期等との関連も見られ、早期の過剰施肥は着粒層も高い位置になり、最終的に草丈は長くなる傾向がある。

草丈に関しては、短稈品種の育成と併せて生産現場での短稈へ向けた栽培管理が重要となる。

#### (2) 脱粒

ハトムギの特性において、脱粒性は大きい要素である。収量確保の面からも、難脱粒性を持たせることはハトムギ栽培にとって画期的で非常に効果的である。

収穫（刈取）と脱穀の2作業を同時に行うコンバインの収穫作業では、脱粒に関係して相反する特性が望まれる。

収穫時（刈取時）は脱粒させない。つまり、難脱粒性は強いほど理想的となる。次に、脱穀時においては作業能率や選別の向上、また碎粒を防止するうえからも脱粒しやすいほうが理想ということになるのだが。

#### 投稿のお願い

特産農作物は生産規模が小さく、且つ、特定地域に特化した形で生産されており、その情報は限定されております。各産地の取組む作物・気候等の条件は違っても、種々の断片的な情報であっても、他産地の情報1つ1つが生産の振興・改善のたたき台として、それぞれの特産農作物、地域特産振興の一助になるのではないかと考えます。

このような視点から、特産農作物に関する論説、種苗供給や栽培等技術論、品種・栽培等試験研究成果、産地の取組状況、産地紹介、イベント紹介等々、種苗に絡んだ幅広い分野についての投稿を歓迎致します。

#### 〔原稿作成要領〕

1. 原稿は、パソコンのワープロソフトで作成し、Eメールの添付ファイルまたはデスク（FD、CD）で送付下さい。（OSはWindows、ソフト：本文は一太郎またはWord、図表などはExcel、Wordを希望します。）

2. 本文原稿の入力は、A4縦置き横書き、1枚40字40行で入力（手書きでも可）図表、写真を組み込んで作成頂いても、別途、図表・写真だけでまとめ、挿入箇所を指定して頂いてもよろしいです。（カラー希望の写真も、原則的には本文中にモノクロで掲示し、グラビアでカラー掲示とします）

3. 掲載原稿につきましては、規定の原稿料と掲載誌をお送り致します。

#### （本件に関する連絡先）

財団法人日本特産農作物種苗協会

住 所 〒107-0052

東京都港区赤坂2-4-1 白亜ビル

T E L 03-3586-0761

F A X 03-3586-5366

e-mail : info@tokusanshubyo.or.jp